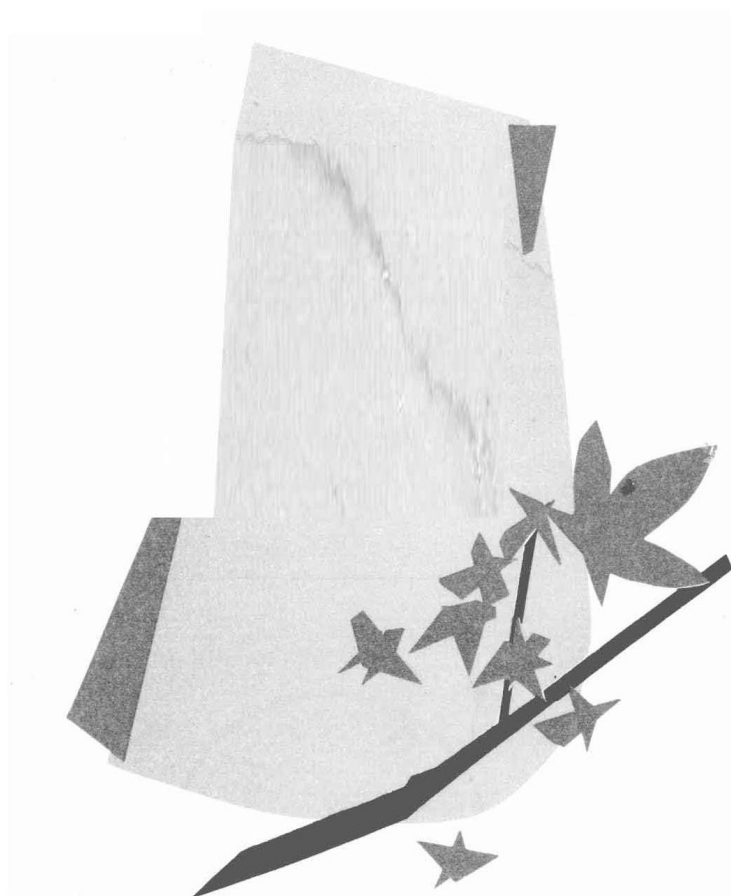


芙蓉の人

新田次郎



文藝春秋

芙蓉の人

昭和四十六年五月一〇日 第一刷

定価 六〇〇円

著者 新田次郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Jiro Nitta

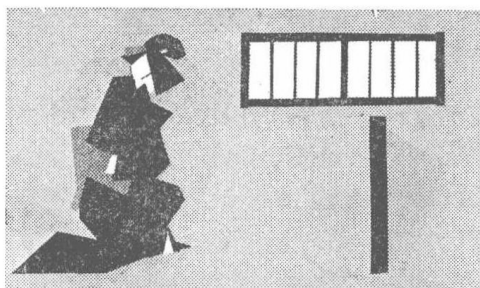
Printed in Japan

0093 - 301970 - 7384

芙蓉ふようの人

装
幀

妣
田
圭
子



千代子は道灌山どうかんやまの頂いたきに立って富士山を見ていた。純白な富士山と青空との対照を美しいと思った。見詰めていると、そのまま吸い寄せられて行きそうであった。

千代子が野中到いたると結婚して東京に来たのは三年前の明治二十五年であった。生家のある福岡から東京へ来る間に富士山を見たいと思ったが、富士山は雲にかくれて見えなかった。東京に来てからは富士山を見るよ
うな機会には恵まれなかったし、東京の市内から富士山が見えるなどとは思っていなかった。だから、千代子が道灌山の頂から見た富士山は彼女が生れて初めて見るものであった。彼女がそれまでに、絵や写真で見たり、夫の野中到の口から聞いた富士山とはずいぶんと違ったものだった。優しい美しさではなく、冷たい美しさだと思った。氷雪の輝きが、青空をバックにしてそれを冷たいものに見せるのか、比較すべきなものもない、その偉容が、結局は冷たい美しさとして受

取れるのかよくわからなかった。とにかく、花を見て感ずるものとは根本的に違ったものを彼女は富士山に見ていた。

「ね、園子、富士山よ、お父さまがいま登っている富士山よ」

千代子は彼女の背にいる園子に云ったが、園子は、ねんねこぼんでんの中で眠っているらしく微動だにしなかった。

到が東京を出発したのは一昨日の二月十四日だった。きのう登る予定だったが、一日中風雨が強かったので、おそらく麓に待機していて、今朝早く山頂に向って出発したものと思われる。あのつややかに輝く富士山のどこかに夫の到がいるのだと思うと、声を掛けて呼んで見たいような気持ちにもなるのだが、すぐ千代子は、いま彼女が見ているのは富士山の東面であって、到が登山した御殿場口は、南面に当たっていることに思いつくと、眼を、富士山の肩から左側に斜めに流れ落ちる稜線にやって、もしかすると、あの辺になどと考えるのであった。

富士山はあまりにも高いがために、冬期は容易に近づき難いところであり、いままで一人として、冬期、富士山の頂上に立った人はいないというのに、到はたった一人でその富士山の頂上に向ったのである。到が、なぜそんな危険を冒して富士山頂に登らなければならないかということは、到の口から何度か聞き、その折には納得できたけれど、いざ到が、その危険な山へ行く段になると、千代子は、到を引き止めたい気持ちになった。

「天気予報が当たらないのは、高層気象観測所がないからなのだ。天気は高い空から変わってくるだ

ろう。その高い空の氣象がわからないで天気予報が出せるわけがない。富士山は三七七六メートルある。その頂^{いただき}に氣象觀測所を設置して、そこで一年中、氣象觀測をつづければ、天気予報は必ず当るようになる。だが、国として、いきなり、そんな危険なところへ觀測所を建てることはできない。まず民間の誰かが、嚴冬期の富士山頂で氣象觀測をして、その可能性を實証しないかぎり、實現は不可能である」

千代子は夫が日ごろ口にしてゐるその言葉を暗記していた。

(だからと云つて、あなた一人が、なぜそんな危険なことをしなければならないのでしょうか)

千代子はそう云いたかつたが黙っていた。こらえていたのである。

今年の一月四日に、富士山頂に登ると云つてでかけたときも、千代子は、到を引き止めたかつた。もしものがあつたならば、後に残つた私たちはどうなるのだと云いたかつた。だが、そのときも千代子は涙も見せずに夫を送つた。彼女は、女は耐えるものだということを、幼児のころから教えられていた。耐えることのみが女の美德であり、それ以外には女の存在を示す方法はないもののように母に教えられ、育てられて来た彼女は、夫が如何なることをしようと、その結果がどうなろうと耐え忍ぶしかない女の道を悲しく思うのであつた。

一月四日に氷雪の富士山に向つた到は、五合目で、氷を割ろうとして鳶口^{とびぐち}を折り、同時に靴の底に打つてあつた、滑り止めの釘が曲つて用をなさなくなつたがために登山をあきらめて下山した。そのとき、千代子は無事に歸つて来た到の前に両手をついて、お歸りなさいませと云つた

けだった。涙が湧いて来そうだったが、姑しゅうとめのとみ子の前ではそれを我慢していた。

その夜、千代子は到が冬の富士登山がいかにも困難であったかを舅しゅうとの勝良に話しているのを部屋の間で聞いていた。勝良は東京控訴院判事であった。

「氷は石よりも鋼はがねよりも堅いように思われました。表面が鏡のように光っていて、もし足を滑らせたなら、そのまま麓まで滑り落ちて行くことは確実です。ところどころに岩が出ていますから、そういうものに、打ちつけられたら生きて再び帰ることはできません」

到は父勝良の前に正座して、いちいち言葉に区切りをつけて報告した。

「結局、鳶口と靴が適当ではなかったというわけか、ほかになにか気がついたことはなかったか」

聞き終ったあとで勝良が云った。

「風です。富士山の冬の風はおそるべき風です。冷たいというのではありません。どっちからともなく突然吹いて来る強風です。その風にやられたときの感じは、暗い夜道を歩いていて、いきなり突き飛ばされたのと同じようなものでした」

ほほうと勝良は、到のその表現に感じ入ったようだった。

「富士山は堅氷で武装し、突風という槍やりを突き出して来るといふのだな、それでお前はその富士山とどのようにして戦うつもりだ」

「堅氷を砕くだいて足場を作るには鳶口ではどうにもなりません。今度行くときは鶴嘴つるはしを持って行く

つもりです。そして、靴の裏に打っていった釘はやめて、もっと幅が広くて先のとがった爪のような釘を打ちつけて行くつもりです」

勝良はなるほど頷いていた。

到はそれから一カ月の間に、何回となく鍛冶屋に行ったり、靴屋に行ったりして準備を急いでいたが、いよいよ一昨日出発するとき、鶴嘴を千代子に見せて、

「これならば、どんな堅い氷でも叩き割ることができる」

と云った。そのとき靴はもう背負袋の中に入っていたから、その底にどんなふうな釘を打っているのか想像することはできなかった。到は、一月四日の登山失敗直後、中央気象台の和田雄治技師を訪ねて、フランス留学帰りの彼に、ヨーロッパの登山用具について質問したことを洩らしていたから、靴の底には、或る程度の改良がなされているものと思われた。だが、千代子には、気象学については造詣の深い和田雄治であっても、登山用具のことなど知るよしもないように考えられ、結局は到自身の創意によって改良されたそのものの出来不出来が、冬富士への登頂の成否の鍵を握るもののように思われた。

千代子は、到がその重い鶴嘴を担いで登るのかどうか訊きたかったが、訊けなかった。そういうことを訊くと到がたちまち不機嫌な顔をするところは、男の勝良が姑のとみに、女は男の仕事に口出しをするものではないと、一方的にきめつけるのとよく似ていた。到は彼自身気が向けば、仕事のことを話すけれど、千代子の方から質問したことに對しては、とがめるような眼ざし

か、もしくは徹底した沈黙を以て応える場合が多かった。

千代子は、青空にくっきりと白い姿を突き出している富士山の氷雪の上を、到が鶴嘴を担いで登って行く恰好を想像するとひどく滑稽な姿に思えて来るし、そうかと云って重い鶴嘴を槍を抱えこむようにして登るとも考えられなかった。彼女は、到がその鶴嘴を、白い氷壁の上で、持て余しているだろうと思った。

到は、前夜御殿場口太郎坊の小屋で風雨の音を聞きながら夜を明かした。雨は朝の六時には止んで青空が出た。到は六時半に太郎坊を出発して頂上に向ったが、季節はずれの前夜の大雨で、雪が溶けたために、雪汁ゆきじりの中に膝までもぐるような苦しい登山を三合目まで続けた。しかし三合目から上は、堅氷に覆われていたし、彼が用意して来た、登山靴の釘がよく効いたので、夏山を登るような気軽さで、高度をかせいでいた。こうなると持参して来た鶴嘴はむしろ邪魔になった。彼は何度かその鶴嘴を置いて登ろうかと思つたほどだったが、頂上近くになって氷がどのようなになっているか分らないから、重いのを我慢して背負い上げた。そしてやはり、彼が想像したように、八合目あたりの、つるつるの氷壁にかかつて、彼が発明した登山靴の釘さえも用をなさないようなところに来たとき、彼は鶴嘴を使って氷を砕いて登路を作った。このことを野中到は「富士案内」の中で次のように書いている。

今回携もた帶たしたるものは、工夫用くふうようの鶴嘴つるはし、毛布製もうふせいの靴と、通常の革靴かはだの底に各々十本づゝの釘

を打ちたるものなり、前回は通常の釘の如きものを靴底に打込みたりしが、堅氷に至りては、円錐形に尖りたるものにては、矢張滑りて、用を為す能はざりしを以て、今回作らしめたる釘は、其形、漏斗の肩を両方より削り卸して、中央に齒を立てたるものに異ならず。（中略）又踵にも一本は、齒を縦に、二本は横に打込みたれば、恰も二分鑿を打並べたるが如くなるを以て、氷上を行くに殆んど滑るの憂なかりし。（中略）予は前回に懲りて、今回は俗に鶴嘴と称する工夫用の器具を携帯せしが、足元確かなりし為、強ち此器を用ひるに及ばず。且つその目方頗る重きが故に、終始携帯せんこと随分難渋なり。然れどもこの鶴嘴も、七合目辺より上は、常に之を打込み、悸慄しつゝ歩を進めたり。この時、身俄に雲中の人となれり。四方朦朧として、方向を失せしが、力めて、路の易きを択び、唯上へと猛進せしに、零時五十五分、俄然頂上に出でたり。零度以下十八度を示せり。

到の記録によると、五合目に着いたのが午前九時三十五分であつた。千代子が日暮里の道灌山の頂から富士山を見ていた九時ごろには到は四合目あたりを歩いてしたことになる。

千代子は寒さを覚えた。きのうの夜は、冬としてはめずらしく雨が降って暖かだったが、今朝になって寒くなった。風がないからいいものの、もし風があつたら、とてもこの丘の上に立つてはおられないと思つた。

千代子は未練を残して、道灌山をおりて、小石川原町の自宅へ向つた。すばらしい天氣に恵ま

れて、到はきつと快調の登山をつづけているに違いないと思った。彼女の心の中の軽さが彼女の足を速めた。

姑のとみ子は、富士山がよく見えました、きつと、到様は順調な登山をしているだろうという千代子の報告を聞き終ると、

「山は登ることよりも降りることの方がむずかしいからねえ」

と、千代子の樂觀をいましめた。そう云われてみると、そのとおりであった。到が無事登り得たとしても、下山の際、誤って滑ったら、すべては水泡に帰することになる。たとえ、案内人が無いといつても、途中までもいいから連れて行けばよかったのにと、千代子はなにかもひとりでやろうとする到の気の強さを恨んだ。

とみ子が云った下山のことを考えると千代子はまた心配になった。仕事が手につかなかった。彼女は、午後になって、もう一度道灌山へ行つて来たいととみ子の前で云った。

「いいでしょう……」

と云うと、とみ子は膝元で遊んでいる琴子に眼をやった。琴子とはとみ子の四十三歳のときに生れた子で、園子と生れた年も月も同じであった。とみ子が充分な乳が出ないので千代子は義妹の琴子に乳を与えていた。とみ子がいいでしょうと云って、ことばを濁らせて琴子の方を見たのは、乳を与えてくれという催促に思われた。そのころの離乳期は一般的に遅かった。園子も琴子も二歳になっているのにまだ乳を欲しがっていた。母乳をなるべく遅くまでやるのが子供が健康に

育つことだと考えていた時代だった。

千代子は琴子に先に乳を与え、後で園子に与えた。千代子は、その順序を常に変えてはいなかった。

園子をとみ子にあずけて道灌山に来て見たが、富士山は見えなかった。いつの間にか、雲が出ていた。東京はこんなにいい天気なのに、なぜ富士山だけが曇るのだろうか、千代子は不満な気持ちを抱いて、家に帰ると、すぐ風呂の支度を始めた。到が今朝富士山に登って、今日のうちに自宅に帰るということはとても想像できないことだったが、もしかすると、という気がしないでもなかった。到は家を出るときに、いつごろ帰るとも云ってはいなかった。ただ行って来るよとひとこと云い残しただけであった。

「千代子、風呂を沸かすのかね」

とみ子が云った。野中家は隔日に風呂を沸かしていた。昨夜風呂に入ったのに、また今夜もと云ってしまつて、すぐとみ子は、千代子がなんのために、風呂を沸かそうとしているかに気がついた。

「到も無事帰ってくれたらいいがねえ」

と云った。千代子はそれに合わせるように、今日は天気がいいからと云った。天気以外に云うことはなかった。そのことを繰返して云いながら、風呂を沸かすことをとみ子が認めてくれたのだなと思った。千代子は襷たすきを掛け、着物の裾すそをはしよつて、風呂の準備に掛つた。

三年前に千代子が野中家に嫁して来て間もなく、到は富士山頂に私費で観測所を建てると云い出した。父の勝良はそれに対して消極的な態度を示していたが、勝良の友人で、東京天文台長の寺尾博士が、まず到の持論に賛成し、更に中央氣象台の技師和田雄治がこれを積極的に支持したことによって、勝良の氣持もまた変った。勝良は、私設観測所の設立費を捻出するための諸費節約の始めとして、女中と書生を廃した。初め反対していた勝良が、到の持論に賛成したのは、その仕事、わが国にとって大事な仕事であり、しかも、非常に困難な仕事だけに、もし成功した場合、日本国民に与える影響はもとより、世界諸国に対して日本の名を挙げることになる点を寺尾博士と和田雄治技師に指摘されたからであった。

「世界において富士山より高いところにある高層観測所は南米のエル・ミスチー山とフランスのモンブラン山の二山だけである。しかもいずれも夏期しか観測をしていない。もし富士山で冬期の氣象観測に成功したら、それこそ世界記録を作ることであり、国威を發揚することである」

和田雄治のこの一言は野中勝良を動かした。到が明治二十二年に、大学予備門を中退して、富士山観測所設立を唱え出したところ、勘当かんとうでもしそうな態度を取っていた勝良が、数年とはたないうちに、完全に到の計画の一翼を担うようになったのは、勝良もまたわが国が一日も早く列強に伍することを願っている明治政府の役人であり、明治的な愛国者であったからである。勝良は明治二十五年から二十六年にかけて行われた、福島中佐による「シベリヤ單騎横断」や明治二十六年の郡司大尉を隊長とする「千島探検」などに対して、熱狂的な声援を送った一人でもあった。

その夜は静かな晩であった。食事の折、到の冬期富士登山が話題になった。勝良は、夏でも日帰り登山はむずかしいのに、厳冬期にそれを期待することは無理だろうと云ったが、到の弟の清は

「兄さんは、もともと不可能を可能にしようとしてやっているのですから、日帰り登山をやっているかもしれません。おそらくそのつもりで登ったのではないでしょうか」

と明るい顔で云った。

「だが、もし、頂上で日が暮れてしまったら到はどうするのでしょうかね」

とみ子が云うと

「そのときは、そのときでなんとかなるさ。今夜はきつと静かですよ」

と清は外を窺うようにしながら云うのであった。

千代子は黙って聞いていた。清の発言はいかにも大学生らしい考え方だと思った。清の顔を見ていると到はほんとうに帰って来るような気がした。

千代子は彼女の部屋に帰って縫い物をしながら到の帰りを待った。彼女の傍で園子が眠っていた。なんの屈託もない顔だった。千代子が覗きこんだとき、夢でも見たのかにっこり笑ったりするのを見ていると、もし、到に万が一のことがあれば、この子は、などと考えて気が滅入るのである。

「あの人は子供のときから足が丈夫だったもの……」

千代子はひとりごとを云った。悪い方に考えず、どうせなら、清のようにいい方へいい方へと考えるべきだと思ったとき、ふと子供のころを思い出したのである。

千代子は到の従妹であった。

千代子の母系子は到の父勝良の姉で、福岡県那珂郡警固村けいこの梅津しえん只圓に嫁したのである。梅津家は代々黒田藩に喜多流の能楽謡曲の師範として仕えていた。邸内に能舞台も設けていた。地名は那珂郡警固村となっているが、警固村は城のすぐ東にある、士族の居住区であった。到の生家がある福岡県早良郡鳥飼村きうもまた城のすぐ西にある士族の住宅区で、直線距離にして両家は二キロメートルとは離れていなかった。到の祖父野中閑哉は黒田家に仕えていた二百石取りの武士であった。閑哉は槍術の達人であり、和算にも秀でていた。

千代子と到は、家が近いから子供のころから往き来して兄妹のように親しかった。父の勝良が明治政府の官吏として地方を歩いていたので、到は祖父閑哉のもとに預けられていた。母と別れている淋しさもあって、到はしばしば千代子の家を訪れた。伯母系子が到をわが子のように可愛がった。

到が十二歳で千代子が八歳のときの正月、千代子は母系子につれられて野中家を訪問した。到と千代子は双六遊びに飽きて庭に出た。そのときお城の太鼓が鳴った。正午の時刻を報ずる太鼓であった。

「お城へ行こう」